日露戰爭理由

225
627

002871-000-2

特17-749

日露戦争理由

和田　久／著

M37

ACB-6421

日露戰爭理由

緒言

我大日本國民の間に、昨年の夏六七月頃より、内物議紛然なつたが、露國との外交問題も、結局交渉不調となつて、本年二月十日、天皇陛下から、斷然露國と、戰爭せよとの詔勅を下し置れた。

其四日前の事、即ち二月六日の朝、我海軍は、聯合艦隊を組織で、九州の佐世保から出發した。其行き先は、朝鮮の仁川と、支那の旅順口であつたが、

明治 3 18 7 交

旅順では八日の夜、仁川では九日の正午、共に露國の軍艦と、戰爭の幕開きをやつた、その結果は、勿論日本大勝利で、仁川に泊た、露國の軍艦二艘を沈め、尚ほ旅順でも、彼是十艦餘りも撃破て仕舞た。

乃で、最早露國の海軍は、花々しく出て、戰爭をする力も滅亡て、退守でしまつたから、海上は最早大丈夫、我陸軍は思ふ存分よ、着々進撃け行かれて、愈々戰爭の本舞臺になるのである。

處で、我々日本國民は、何の爲めに我國が、露國と戰爭するのであるか、又何故、戰爭をするやうな

次第になつたのか、其因縁理由を、知らおくてはおらん、勿論誰でも、新聞を讀み、又世間の噂を聽いて、確然心得て居るに違ひなからう。

けれども又中には、婦人方や小供方、老人方などに、或は充分理解て居られん、人もありはしまいか、奈何もあるやうに念はる。

これと云ふのも要は、新聞や雜誌などは、一寸小六ケ敷、又人の取沙汰も、好加減なもので、前後の筋道が、貫徹難いからであらう、而しながら、今大日本帝國の、人民一個でも、此戰爭の成立を知らん

では、濟されない。苟くも世界の一等國、文明國と云つて、威張て居るからには、この危急存亡の大戰爭を、理由も理解ずに、晏如として居れん筈だ。

乃で、作者は、江湖老幼の爲めに、此戰爭の因緣と理由を、極平易、誰が讀でも、直ぐ理解るやうにと、念ふて、此本を書た譯です。

日露外交問題と其原因及び結果

抑々我國民が、八ケ間敷く物議た、露國との外交問題と云ふのは、即ち、露國が無法にも、滿洲を自分の領分に、仕樣と云ふ目論見で、其處に屯集てある、露國の軍隊を、撤回ないからである。

其滿洲とは何處か、それは支那の東北で、極廣い、日本から見たら、何層倍もあらうと云ふ土地で、恰、露國の領分と、背合せになつて居る。けれども、そ

れば明瞭に、支那の領分である。

それに何故露國は、自分の兵隊を屯集してあるのか、又日本は何故、他國同志の事を、彼是干渉のか、それには大に、曰くのある事だ。

恰、明治三十三年に、彼の北清事件と云つて、支那人中の一團体、義和團と云ふ匪徒が、支那の兵隊と合体して、各國の公使や領事、其他外國の人を、危害やうとして、騒動やつた事がある。

其時日本始め、露國其他の外國も、それぞれ、海軍を遣り、陸軍を送つて、其騒動を、鎮めやうとした。

處が、支那の朝廷に、端郡王と云ふ、勢の強い人があつて、無謀にも其各國の軍勢を、撃退ふとしたので、些の騒動が、愈々支那相手の、本物の戰爭となつて、到底各國聯合軍が、支那の都の北京へ、進撃る事になつた。

其時また滿洲にも、清兵や、種々な團群の匪徒が、彼方此方騒動を始めて、終には支那の馬賊と云ふ一群が、露國の西比利亞と云ふ處へ、闖入つて、其處の黒龍江の首府、ブラゴウエスチエンスク府と云

ふのを、包圍攻撃てた。で、露國は驚いて馬賊を防ぎ、漸くの事で滿洲も鎮めた。

それから北京の方も、各國軍が攻め陷して、騒動も全体に鎮める、支那からも謝罪つて、其事件は一先段落たが、偖て奈何も支那と云ふ國は、危險な處だ、何日何時又騒動を、始めるかも知れない、そう云ふ危ない處には、各國から軍隊を、屯在なければ不安心だ、とは言へ、他國へ無闇に、軍隊を屯在れるものでもないが、兎も角も暫時、人氣の靜るまで、軍隊を駐く必要があるので、それ〴〵期限を定めて、

各國から駐く事になつた。

乃で滿洲の方は、全く他國が關係しなかつたから、露國だけで、軍隊を駐く事になつた。

これぞ即ち、滿洲に露國の、軍隊が在る所以である。

けれども、それとて又撤兵期限が、確乎と定めてある。

然るに其撤兵期限の、第一回も空しく過ぎ、第二回即ち、昨年四月八日にも、露國は全く其撤兵をしない。

尤も露國が、支那への約束は兎に角く、諸外國へ

の、手前があるから、顯然兵隊の姿で、駐く譯にも行ない。

乃ーで或は商人に化けさしたり、又鐵道工夫に裝さしたり、などして一人も歸しはしない。

それはかりか、窃に本國から、多數の兵隊を繰込ませし、又種々な權謀術數をしては、支那を洞喝したり、弄絡したり、飽まで傍若無人の、舉動をするから、乃で日本は、國民擧つて、八ケ間敷く言ひ出した。

それには又深い、因緣話がある。

忘れはしまい、一今を去る十年前、我國が支那と戰爭した事を。其時戰爭に捷つて、支那の遼東と云ふ處を、日本の領分にした事がある。其遼東と云ふのは、即ち滿洲の南の端で、其處には有名な、旅順口と云ふ港がある。

露國は、かね〳〵其港を望んで居つた、と云ふ譯は、露國は非常に廣い、日本と比べると六十倍もあるが、奈何も世界の北の端で、役に立ぬ土地が多くて困る。乃で東の好い處を、自國の領分にして、追々世界に、威勢を張ふと云ふ、大層な山氣で、其目論見をしたが、偖て、東洋に手を延すには、奈何して

も海軍の力を、籍なくてはならぬ。が、悲しいかな露國には、東洋に軍艦を繋く、良い港がない。只一つ、丁度日本の北の向へに、浦塩斯德と云ふ港あるが、何分非常な寒さで、冬向は三尺以上の氷が張つて、到底も船舶の、出入が出來ない。であるから奈何かして、結氷ない港が欲しい。何の道手に入るならば、一番良いのを。それには旅順口に限る、と云ふ譯で、垂涎千丈で、機を伺つて居た。

處が豈斗んや、日清戰爭が始つて、日本が其遼東を、占領て仕舞た。露國は思寄外れて、大に狼狽へた。

それはかりではない、遼東一帶、日本の領分となつた曉には、豫て自國が目論んだ、大山も崩れ、最早東洋に、手も足も出せない。とれは奈何しても、苦情を言はなくてはならん。が而し、自己一ケ國はかりでは、日本も承知しまい。と云ふので、佛蘭西、獨逸の、二ケ國を唆かして、茲に三國同盟を作り、日本へ掛合をして來た。

其時の言分が、實に斯ふだ。日本が遼東を占領のは、東洋平和を害ふから、支那へ還附して遣れ、と云ふのである。而して萬一日本が、不承知なれは、

兵力づくでぐも、還附させると云ふ、勢を示て迫つた。

此時日本は、何も三國位、さう怖くはない。けれども漸く戰爭が、濟んだばかりで、國家の財力も減つて居る、兵隊も疲れて居る、それに支那から占領した臺灣の、整理もしなければならん。それやこれやで、又候三國相手の戰爭も考へものだ。

殊には日本が始め、支那と戰爭したのも、要は東洋平和の爲からであるのに、今日本が、其遼東を領分にすれば、再び平和が破れると云はれて見れば、

強ち頭も振れない羽目となつて、到頭遼東を、支那へ還す事にした。此時我等國民の胸のうちは、奈何であつたらう、實に血の涙が出た。

それに引替へ露國は、首尾よく日本から、遼東を、支那へ還へさせて、それを手柄に此度は自國が、豫ての存念通り、旅順を軍港に借受けた。が、其實還す氣はなく、結局日本から、横奪したも同じ事だ。

此始末を見た、我國民の血は沸いた。已れいまに見よとばかり、大に陸軍海軍の軍勢を增して、時とそ來れと待ちかまへた。

而し又露國の方も、自國が斯ふ云ふ仕方で行けば、終には日本も默つては居まい、孰れ戰爭になるだらうと、覺悟したに違ひない。而し日本の手並も、日清戰爭で見て居るから、なか〳〵油斷は出來ない。乃で先づ、思ひ通り手に入れた、旅順口に太平洋艦隊を集め、それから大急ぎで、豫ての目論見に取掛つた。

處へ以て來て、露國には寔に好機會、前述べた滿洲の騷動があつたので、其鎭撫を名として、陸軍の兵を其處へ駐屯いた。さうなると最早お手のもので、

勝手次第な事をする。先づ鐵道は、旅順から滿洲を貫いて、本國へ通ずる樣にするし、電信は引張るし、種々な製造場は營るし、兵營は建る、役所は拵へる、恰で自國の領分にするやうな事をする。其代りには、又仰山な費用が入つて、佛蘭西から借金したのも、何億萬圓と云ふ位だそうだ。

さう云ふ始末であるから、期限が來ても、兵隊を撤回る譯には行まい。勿論始めから左樣な考へはなく、戰爭覺悟で仕掛た山だ、彼是言ふだけが野暮さ。

而しながら露國も、歐羅巴の文明國だ、義理人情

も辨へて居るだら。それにしては餘り無謀な、餘り非道い仕方で、日本を踏付にするも程がある。

前には日本が、幾萬の兵の血を流し、命を捨てゝ、漸く戰捷の手柄に占領つてさへ、愚圖々々言つた露國が、瞞着手段で旅順を横領た上、滿洲一圓に併呑ふとは、其圖々しさ加減に呆れるが、而かも露國が口實にした、東洋平和は奈何なるだらう、飽くことを知らぬ貪慾な腹の底には、滿洲位では未だ足るまい、して見れば、無事に治まりそうな事思ひも寄ぬ。

又實際、滿洲を露國に横領したならば、自然の結果で、支那は滅茶々々になるし、朝鮮なんぞは影もなくなる、其上日本も隨分危ない、して見れば單の他人事や、又前に露國との、遺趣があるからの故はかりでもないので、實に我國を衛る上から言ふても、又支那や朝鮮を庇ふ、人情の上から云ふても、東洋平和を保つ、道理の上から云ふても、我國民たるものの、もう我慢はして居られん。

乃で、最初我國の政府は、露國が四月八日の期限に、滿洲の撤兵をしないから、それに對する方針と、決心を確めて置ねばならんので、其六月三日　天皇

陛下の御前で、朝廷に縁故の深い、伊藤侯、山縣侯、大山侯、松方伯、井上伯の五人と、今の内閣の、桂總理、山本海軍、寺内陸軍、小村外務の四大臣と、會議を開いたが、結局は露國の出やうで、斷然撃退ふと云ふ、腹を据へられた。

けれども文明國たる我國が、輕卒な喧嘩買ひも餘り大人氣なし、又戰爭で血の流し合ひも、既に今日野蠻の極であるから、出來るものなら外交折衝で、纒めたいと云ふ趣意で、先づ露國に居る、日本の公使から、我國の意見を申込まました。其條件は。

第一、支那や朝鮮の獨立を害めず、又其領分に手を付けない事。

第二、支那や朝鮮で商業や、工業をするには、各國同じやうに出來る事。

第三、朝鮮で日本が、優越つた利益を得る事を、露國は承認する事。其代りまた日本は、露國が滿洲に敷いた鐵道の利益と、それを護る必要な處置を、執る事を承認する事。

第四、朝鮮の政治に改良などするため、其助言や助力は、日本だけが出來る事を、露國が承

認する事。

第五、今後朝鮮の鐵道を、滿洲へ延長して、露國の敷いた鐵道へ、接續に付いては故障言はん事。

斯ふ云ふ意味合ひの、五箇條であるが、之に對して露國は、又自國の意見を持出した。

それは第一も、第二も、否認と云ひ、第三から第四第五の、日本の利益と權利に、勝手な難癖をつけて、剰に滿洲での日本の利益は、全く範圍外だと云つて來た。隨分無茶な話で、誰れが承諾が出來るものか。日本政府は斷然拒絕けた。

すると、此度は露國で、其返答に遷延して、漸う十二月十一日に寄越したが、それには滿洲の事柄を削除けて、只朝鮮の事ばかり云つて來た。

而し抑々の問題が、滿洲であるのに、それを削除けては、一向交渉にならん。素より露國は、其滿洲に付ては、眞面目な折衝をする考はないので、只譯もなく遷延して、其間に戰爭の準備を、充分にしやうと云ふのだ。

日本は其腹の底を、確乎と見透いては居るが、じ

つと辛抱して、其後折返しては二度三度、終に最後の、本年一月十三日に、尙ほ能く考へ直せと云ふてやつた。

處が露國は、それから何んとも返事しない。もう駄目だ、そんな没理漢は、膺懲より外に途はない、交渉斷絶！　日本の公使引揚よ！　露國の公使も立去れ！

茲に愈々破裂と決定て、それ撃て！　と云ふが早いか、日本艦隊は、仁川に、旅順に、露國の軍艦を撃沈めた。繼いて宣戰の詔勅は下つて、露國も同日に出した。

これが日露戰爭理由の筋道であるが、偖て戰爭は結局奈何なるのであらうか。正義の軍と、非道の双だ。相場は既に確定て居る。

大日本帝國萬歲！

（畢）

2K-21

明治三十七年三月十三日印刷
明治三十七年三月十八日發行

著作兼發行者　神戸市橘通一丁目九番邸　和田久

印刷者　神戸市兵庫吉田新田四十四番邸　山根正美

印刷所　神戸市多聞通二丁目百四拾七番邸　西村和歐活版所